

日本カリキュラム学会編「現代カリキュラム研究の動向と展望」教育出版 2019年5月30日刊を読む

第1部 カリキュラム理論の展望

第1章 カリキュラムとは何か

第1節 カリキュラムの語義と実体

1. カリキュラムという用語

(1) カリキュラムと教育課程

① curriculum : カリキュラム

② 学校において編成する教育課程とは学校で編成する教育計画だ

(2) 次元・レベル : 「カリキュラム」は原語の英語の意味を反映し、広い意味をもつ

① 「カリキュラム」とは、「国家の次元から学校ないし個人の次元までを含む子どもの学習履歴を指し、学校でのものだけでなく、社会に出てからのものも含めるべきだ」

(米.W.Pinar パイナー)

② 「カリキュラム」は計画レベル、実施レベル、結果レベルのすべてのものも含めるべきだ

(ア) 「計画したカリキュラム」

(イ) 「実施したカリキュラム」

(ウ) 「達成したカリキュラム」

* 国際教育到達度評価学会の TIMSS (第3回国際数学・理科教育調査のカリキュラムの定義)

③ 「潜在的カリキュラム」も注目されている

(3) 「カリキュラム」とは「子どもの学習経験の総体」(J.Dewey デューイ)

<カリキュラムとは>

① 「教育課程表などとして書かれた文書」

② 「それを実施している授業全体の過程」

③ 「その結果としてのテスト成績や通知表の中身に表れる子どもの姿」

* これら3つのレベル全体を含むもの

(4) 「プログラム」とは

① 「カリキュラム」の中にあるより細かい部分的な指導計画・学習計画を指す

② 通常「カリキュラム」の一部を示すより範囲の狭いもので、どちらかというとな計画レベルのものを指していることが多い

③ (ア) 「国語科プログラム」とは普通いわない

(イ) 国語科の中の「読み方プログラム」や

(ウ) 国語科の中の「漢字の書き方プログラム」というのが普通

2. カリキュラムの実体と類型

(1)カリキュラムは何を意味しているか

- ①カリキュラムの語源は、ラテン語の「currere 走る」
- ②学習者の学習を「走る」ことに見立てて、「走路= 経歴・履歴」(Course of Study)のこととされる
- ③大学などでは、「履修課程・教科課程」などとも訳される

(2)①「学習者一人ひとりのもの」例：Aさんのカリキュラム

- ②「学校側が用意した学習者全員のもの」例：小学校カリキュラム
- ③「各教科・科目ごとのもの」例：国語科カリキュラム
- ④「ある地域・地方のもの」例：愛知県知多地方カリキュラム
- ⑤「国のもの」例：英国の国家カリキュラム

*この区別は次元やレベル、文脈に依存し、その中身も異なってくる

(3)「カリキュラム」は

- ①教師と学習者との間で、
- ②両者の成長・発達、
- ③特に学習者の資質・能力の育成の
- ④「手段・道具・媒介」として
- ⑤位置付けられ、機能するものであり、
- ⑥それは必ず「教育内容」を伴うもの
- ⑦これを伴わない教育的場面もあるが、それは「カウンセリング」というべき

(4)そこで、媒介となった具体的なカリキュラムは、次のような要素により、一定の方法的処理を経てつくられる

- ①教育内容：教える知識・技能・態度・価値・活動・経験
- ②組織原理：教育内容の組織の仕方
＜教科・科目、〇〇活動、〇〇時間など＞
- ③履修原理：履修の仕方
＜年数(年齢)主義、課程主義、必修、選択など＞
- ④教材：教育内容を教える際の材料・道具
＜教科書教材、視聴覚教材、実験教材、実物教材など(教具・教育機器は「教育内容」をもたない)＞
- ⑤授業日時数：年間授業日時数、週時数、一日の時数、単位時間など
- ⑥指導形態：一斉指導、小集団指導、個別指導、実習、実験、調査など
- ⑦指導方法・指導技術：発問、指示、説明、評価など
- ⑧授業内容：授業中における情報・意見の交換など
- ⑨潜在的カリキュラム：授業の目標を超えて、子どもが結果的に身に着けた知識・技能・態度など

(5)カリキュラムの類型

- ①分科(教科)カリキュラム
- ②関連(相関)カリキュラム
- ③広域カリキュラム(教科型)
- ④広域カリキュラム(経験型)
- ⑤コア・カリキュラム
- ⑥生成カリキュラム

*上記①～③が教科中心型カリキュラム…知識中心カリキュラム

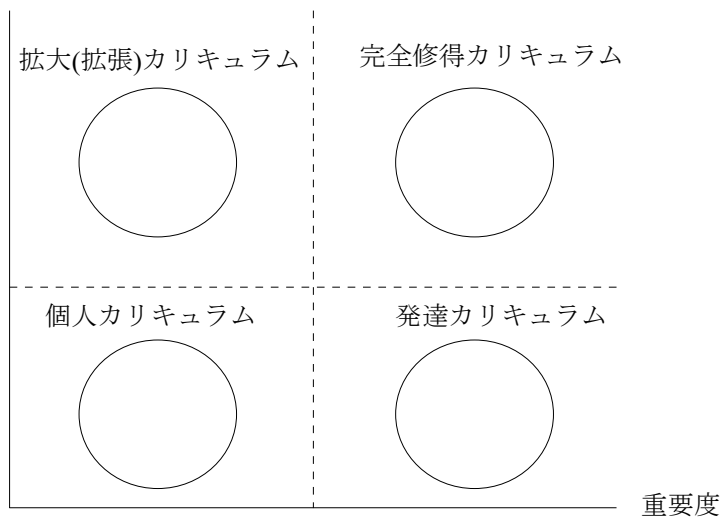
④～⑥が経験中心型カリキュラム…子どもの活動・経験中心カリキュラム

*カリキュラムは教育目的・目標に従属する変数。独立変数たる目標となる育成すべき資質・能力に応じて、全体としては複数の類型を組み合わせる「ハイブリッド型」になる

(6)もう一つの「カリキュラムの類型化」

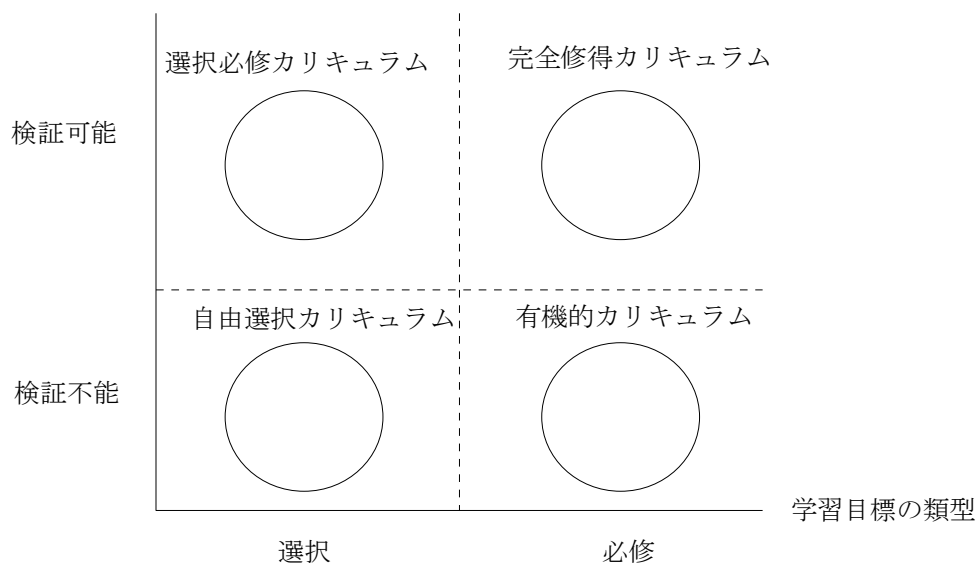
<グラット・ホーン(A.A.Glatthorn)のカリキュラムの4基本類型>

構造



<ラスカ(J.A.Laska)のカリキュラムの4基本類型>

教授の類型



第2節 カリキュラムの背景的要素

1. カリキュラムの背後にある4つの要請

(1) 「学問的要請」

<教える価値のある学問・芸術等の研究成果と方法>

- ① 大学で、教授がその研究成果について学生に向かって「何を」教えるかを、当初は教授の自由に任せてきた。しかし、それでは種々の面で問題が出た。そこで、17世紀にカリキュラムをつくって学生に示すことにした
- ② それは、基本的に「学問のどこからどこまでをどのように教えるか」という「方法的」観点から計画的に記されていた
- ③ これが、その後、大学に入る前の準備期間でも、まず中等学校、さらには初等学校でも求められるようになった

(2) 「社会的要請」

<現在ないし近未来の社会が求める資質・能力>

- ① 社会的要請は、その中に政治的要請や経済的要請を含めて考える必要がある
- ② 特に、初等・中等教育、つまり、小学校や中学校、高校などの「公教育」学校は、基本的に「公権力」の求める政治的・社会的・経済的要請をもとに、「人材養成」のために運営されてきた
- ③ 特に「義務教育」や「職業高校」などの「職業に関わる専門的能力」を育成する教育は、この「社会的要請」を強く受けたもの

(3) 「心理的要請」

<子どもの興味・関心、個性、性格、発達>

- ① 近代以降、「子どもの独自の価値が認められるようになり、教育や学習が、子どもの「成長・発達」や「興味・関心」を抜きに行っても成果がないことが、正面から問題とされるようになった
- ② そこで、今では、子どもの成長・発達に関する生理的・心理的状况に配慮し、
- ③ また、子どもの興味・関心を引くような内容や方法を工夫しなければならないことが、必要不可欠なこととして認識されるようになっている

(4) 「人間的要請」

<人格性・人間性、地球、生命全体に対する人間の責任性>

- ① 「人間とは何か」という問いを自分に向けずにはおられない状況が、原子爆弾の登場以降、地球環境問題も含めて全く新たな問題として立ち上った
- ② 原子爆弾や地球環境問題は、人類や地球生物を破壊的な状態に導く恐れがあるとの「人間の自己責任」の問題が歴史上初めて生まれた
- ③ 公教育の「カリキュラム」で、このことをすべての子どもに偏りなく認識させる必要がある

2. カリキュラムの背後に隠れているもの

<潜在的カリキュラムの存在>

- (1) 「顕在的カリキュラム」と「潜在的カリキュラム」
- (2) 「潜在的カリキュラム」とは、顕在的カリキュラムの裏で、あるいはそれに伴って、そのカリキュラムが隠れたかたちで生み出す別の効果もある
 - ① 公教育による階層の再生産
 - ② 人種や性などの種々の差別化
 - ③ 政治的強化
 - ④ 校風や伝統
- (3) 「教室言語」

学校では中産階層の使う言語体系が使われるので、中産階層の子どもはすぐにその教室語に慣れて「内容」の学習に入れるが、労働者階層の子どもは「内容」の学習に入る前に、教室言語の修得が必要で、一種の「潜在的カリキュラム」としてこれを身に着けないと「内容」の学習にスムーズに入れない

(安彦忠彦著)

<コメント>

では一体、開倫塾の「カリキュラム(教育課程とかくれたカリキュラム)」とは何か。頭の芯が痛くなるくらい考え抜いてみたい。自分の担当する校舎、クラスの塾生ひとりひとりにとっての最良のカリキュラム(教育課程とかくれたカリキュラム)とは何かを頭の芯が痛くなるくらい考え、失敗を恐れず、実行に移して頂きたい。それが開倫塾の存在意義、先生方おひとりおひとりの社会的責任だと考える。

2019年6月19日(火)

林 明 夫